

公開学術講演会「感染症との闘い」のための挨拶

主催 日本学術会議第二部、日本学術会議北海道地区会議

共催 北海道大学

後援 北海道新聞社、日本医歯薬アカデミー、日本学術協力財団

2015年8月5日(水)

於 北海道大学医学部学友会館フラテホール
日本学術会議会長・豊橋技術科学大学長 大西隆

日本学術会議の第2部と北海道地区会議が主催し、北海道大学の共催、北海道新聞社、日本医歯薬アカデミー、日本学術協力財団の後援によって、公開学術講演会「感染症との闘い」が開催されるにあたって、ご来場いただいた皆様、共催と後援で本シンポジウムを支援して下さった皆様にお礼を申し上げます。

日本学術会議は1部の人文社会科学、2部の生命科学、3部の理学工学という3部から構成されたまさに学際的な組織です。本日のシンポジウムは、そのうちの生命科学系の第2部が北海道地区会議とともに準備に当たってきました。関係者のご尽力にも感謝申し上げます。

地区会議や、こうした講演会の開催は、日本学術会議の活動をできるだけ多くの皆様に知っていただくためにとても重要な機会です。特に、夏には、毎年夏季部会を開催し、合わせて公開の学術講演会を開催することが慣わしになっています。

さて、2003年のSARS、2009年の新型インフルエンザの流行は記憶に新しいところですが、感染症対策、つまり、ヒトヒト感染の新型インフルエンザの心配、あるいは去年から今年にかけて心配したMERS、エボラ出血熱、デング熱など、の流行をどう防ぐのかというテーマは、多くの日本人が関心を持つことのひとつであります。国際的にも関心が高く、本年、ドイツで行われたGサイエンス、つまり、G7サミットに合わせた科学アカデミーの会合でも、「感染症と抗菌剤耐性：その脅威と対策」、「顧みられない熱帯病」という感染症に関連した2つのテーマが取り上げられるなど、科学アカデミーの国際的な議論でも欠かすことのできないテーマになっています。特に、後者の「顧みられない熱帯病」は、先進国ではほとんど見られないが、途上国などにウィルスが残り、根絶のための研究や薬品の開発に資金が投じられなくなり、研究が進んでいなかったり、特効薬の開発が行われていなかったり、薬が普及していないといった状況にある感染症が、時に地域的な、あるいは世界的な流行を起こす問題を取り上げたものです。

対策の根本には、感染症の予防や治療といった医学・薬学的な対応が不可欠ですが、同時に感染症の罹患者が保菌期間、潜伏期間や発症後にどれだけの人々と接触することによって感染のスピードや広がりが変わるので、都市や交通が発達した現代社会に特有の問題を含んでいるといえます。

実は、私も、2012年8月発足した新型インフルエンザ等対策有識者会議のメンバーとなり、ヒトヒト感染の新型インフルエンザ対策の議論に加わってきました。流行時に

医療機能や社会機能を維持するために必要なパンデミックやプレ・パンデミック・ワクチンの予防接種対象者の特定や優先順位、流行時の集客施設等の営業規制等を検討したものです。これから、この講演会で取り上げられる予防や治療とともに、人から人へ感染しやすい状況を作らないことが重要だという考えがその背景にあります。裏返せば、人口稠密な地域の存在、短時間で都市から都市、国から国へ移動できる高速交通網の発達で、世界中が感染しやすい近さに置かれるようになったというわけです。

昨日の報道で、東京の武蔵村山市に設けられている国立感染症研究所のBSL 4施設が稼働する見通しになったということです。感染症の治療や予防に新たな発展が期待できるとともに、科学者にとってはその管理に関する大きな責任が生じました。

また、北海道大学は、獣医学部や医学部、さらに人獣共通感染症リサーチセンター等でこのテーマに関する研究を先進的に行ってきました。まさにタイムリーな時期に、最も相応しい場所で感染症の議論が行われることを嬉しく思います。

それぞれの分野の第1線でご活躍の講師の先生方による本日の講演会が参加者の皆様にとっても有意義なものとなることを祈念してご挨拶とします。